

特集 : ウェアとギア

オリエンテーリングの普及が進んだ1970年代、オリエンテーリングは道具にお金がかからないスポーツだった。必要な用具はコンパスだけ。今でもその状況はほとんど変わりが無いが、コンパスは多様性を増し、ウェアにも様々なデザインのものが登場した。

今回の特集では、ウェアやギアのこれまでを振り返りながら、最新のトレンドや、その購入方法、エリートたちがどんなギアを使っているのかを紹介する。オピニオンで鹿島田氏が提言するような、望ましいウェア、ギアのあり方を考える一つの手がかりにもしていただければと思う。

最近多くの大会で併設されるようになったトレイルOについても、併せて紹介！

ウェアとギアの過去、そして現在

村越 真

ウェアとギアの変遷

様々なデザインと高機能化が進んだスポーツウェアの中において、オリエンテーリングウェアは、20年以上の間、大きな変化が見られなかった。最近になってようやくノーネームを初めとする新しいメーカーや旧来のメーカーによって、新しいウェアの流れができた。

ギアに関しては、ここ数年は大きな変化は見られないものの、1980年代と比較すれば2世代くらいの変化があった。本特集ではこうした変化を振り返りながら、現在のウェアとギアのトレンドについて紹介する。

かつてのウェア

1980年代前半まで、定番のオリエンテーリングウェアというものはなく、個人個人ができる範囲の工夫で、ウェアを用意していた。一般のオリエンティアは、ジャージに夏はTシャツ、寒くなるとその上にトレーナーやウィンドブレーカーを着るといった、普通の運動着を着てオリエンテーリングをする時代だった。

もちろん、当時すでにナイロン製のOスーツは登場していたが、国内では市販されておらず、ヨーロッパに遠征した（これもまた当時は希有なことであった）人が、彼の地で購入したものを誇らしげに着ていた。その代名詞がトリムテックスであった。当時は、技術的に未熟な下級生オリエンティアに対して、上級生が「トリムを着ている人ならついていっても大丈夫だ」といった指図が行なわれる時代だった。

トリムテックス全盛時代

この状況が一変したのは1981年ごろからである。日本のナショナルチームが

ウェーのトリムテックス社製のウェアをユニフォームに採用し、またレプリカモデルを市販した。「強くもないのに、Oスーツを着て...」という抵抗感があったのも一瞬のことで、当時は結構面倒であった個人輸入をナショナルチームが代行したことが、大学クラブの興隆と相俟って、トリムテックス社製のクラブウェアの独占状態を招いた。トリムテックス（あるいはトリム）は、Oスーツの代名詞となるにいった。

その後、フィンランド製のテルニット、スウェーデンのシルバのウェアなどが市場に参入してきたが、トリムテックスの大きなシェアは変わらなかった。トリムテックス自体も、マイナーチェンジを何度かしたが、基本的には2000年を過ぎるまでの約20年間、Oスーツの世界には大きな変化は全く訪れなかった。

唯一の変化は、1980年代後半に使われるようになったタイツである。冬場がメインシーズンである日本では、ナイロン製のOスーツは防寒性という点で不十分である。ナショナルチームメンバーを中心に、タイツの利用が普及した。ただ、体型がもろに出るし、比較的破れやすいため、Oスーツの主流の座を占めるまでには至らなかった。

新世代のウェア

ノーベル文学賞受賞の大江健三郎はナイロン製のOスーツのことを「ピラピラの布のユニフォーム」と描写している（大江健三郎「キルプの軍団」岩波書店）。文学者らしく「ダサイ」という言葉は使っていないものの、やや風変わりなウェアであるという印象を受けたのであろう。オリエンティア、とりわけエリートの間でも「Oスーツ

はダサイ」という認識は1990年代後半から広がった。「あれが、オリエンテーリングが普及しない理由の一つである」とさえ見なされた。確かにオリエンテーリングから派生したアドベンチャーレースでは、初心者でさえカラフルでスタイリッシュなウェアを着ている。時代にあったウェアが求められていた。そこで登場したのが、ノーネームであった。トップエリートたちが、自分たちで着たいデザイン、機能を持ったウェアを作ったのだ。



（写真）旧タイプのOスーツ（右）と、身体にフィットしたニュータイプのOスーツ。ボトムはタイツタイプである。

ギア・「コンパス」の変遷

1930年代にチェルストロム兄弟が、コンパスと分度器を一体としてシルバコンパスを開発した時、現在のベースプレートコンパスの原型はできあがった。それ以来、20世紀の後半の前半、コンパスに大きな変化は全くなかった。

シルバコンパスの開発以来の大きな変化は、1970年代後半のハンディーコンパスの登場だった。この時代、O-mapはその精度や内容という点で大きな進化を遂げた。地図情報に頼ることで、確実なオリエンタリングが可能になった。そうすると、コンパスでの長い直進の価値は相対的に低下し、むしろ整置によるナビゲーションが重要になった。ベースプレートコンパスで通常の使い方をする時、地図とは異なる手でコンパスを持つことになる。整置のためには両手を身体の前方で合わせる必要が出、ランニングのバランスを崩すことになりかねない。整置に頼るナビゲーションをするなら、直進のためのプレートは不要であり、その分地図を持つ手で扱えるコンパスが必要になる。

ハンディー/ ノルコンパスの登場

このような発想で作られたのが、スト社のハンディーコンパスであった。ハンディーコンパスは、大きな成功を収めず、一部の選手に利用が限られていたが、より大きな流行となったのがノルコンパスである。



スト社のハンディーコンパス。地図と離れるので、正置の精度が落ちやすい。



トップエリートが大陸トレイルでの高速オリエンタリングのために開発したノルコンパス。その後ノルコンパスはシルバ社に買収される。

ノルコンパスは、1980年代前半、当時トップエリートであったノルウェーのオイビン・トンらの協力で開発されたものであった。スカンジナビアに比べてナビゲーション

が容易な大陸での世界選手権が1981年以降続くことで、直進性を犠牲にしても整置に余計な時間の不要なコンパスが求められていた。ハンディーコンパスはその要求の一部には応えたが、手の甲に付けるといった特徴上、地図とコンパスが離れる。見やすいものではなく、正置の精度が保ちやすいとは言いがたい。ノルコンパスはこの欠点を改良し、親指の先に付けて地図と一体に持つことができた。ノルコンパスは、元々直進が不要だった日本の市場にも受け入れられ、一世を風靡した。

コンパスの高性能化

コンパスの中心的機能は、北を指すという単純なものなので、それに改良を加える必要性はないように思われていた。そこに登場したのが、高磁力を持ち、針の回転速度が速く、しかも慣性で針が北を通過して再び振れてしまうことがないモスクワコンパスであった。

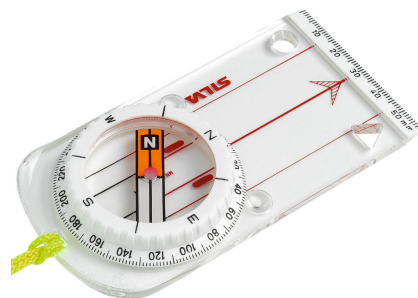


モスクワコンパス。発売当初のベースプレートタイプではなく、サムコンパスタイプのモデルである。リングには動きは針の動きは速い方や振動に神経質なファストと、針の動きはややゆっくりだが安定性のあるステープルの2種がある。

このコンパスを初めて見た時の衝撃は忘れられない。針の安定性、針の戻る速度いずれをとっても、それまでのシルバコンパスとは格段に違っていた。あまりに針が安定しているので、慣れるまでは引っかけ止まっているのではないかと不安になるほどであった。針の回転期間の差はほんの0.1秒程度の違いだったが、1秒を争うエリートにとっては、十分に大きな差であった。

シルバ社は世界選手権で毎回出口調査によって選手が利用しているコンパスの種類を調査しているが、80年代後半には世界選手権のメダルの少なくない割合がモスクワコンパスによって獲得された。シルバからスポンサーを受けている選手の中には、レースではモスクワを使い、ゴール直後にシルバコンパスに持ち換えるものもいたほどである。

シルバ社は、モスクワに刺激され、その後針の動きの速いジェットシリーズを開発した。またスト社も、アローシリーズを出している。



シルバ社の高性能コンパス5ジェット。多くのエリートに愛用されている。

ギア・拡大鏡

隠そうとしても、歳は隠せない。40歳過ぎたら、縮尺1:15000の地図を読むのが辛くなる。我慢して裸眼で地図を読んで苦しい思いをしたり、ミスをするくらいなら、潔く拡大鏡を使おう。現在では、サムコンパスやプレートコンパスに装着できる拡大鏡も販売されている。



拡大鏡をつけた、シルバ6ジェット

ギア・デフケース

地図とは別に配布される一説明をどうやって携帯するかはちょっとした問題である。かつては、0スーツの胸のあたりにビニールケースに入れてぶら下げるといったことも行なわれていたが、現在の主流はデフケースである。シルバ社のものがドットコンパスなどで販売されている。この程度のものであれば、自作でも十分対応できそうだが、



シルバ社製デフケース

ギア・靴

オリエンテーリングは、もっとも靴への要求の厳しいスポーツの一つであろう。長距離種目だから軽い方がよいに決まっているが、様々な地面を走る競技特性上、ごつごつした岩や踏み抜きから足を守るだけの強度も要求される。湿地も走るの、水を吸った時に重くなりすぎるのも困る。滑りやすい地面や岩盤などの上を走ることもあるので、強いグリップ力も必要とされる。こうした要求を満たすというよりも、適当なところで妥協したのが、現在のオリエンテーリングシューズである。

かつては、アディダスやナイキがオリエンテーリング専用シューズを出していたこともあったが、その市場の小ささから、現在では専用メーカーの独壇場である。

オリエンテーリングシューズの値段には割高感がある。しかし、ジョギングシューズと比較して特別高いというほどでもない。市場が狭く、要求が厳しいことを考えれば適正な値段と言えるのではないだろうか。丈夫なスタッドと踏み抜きへの強さだけでも、十分に専用シューズの価値はある。

現在市場を二分しているのは、ゴムのスタッドだけのものと、その上に金属のピンがついているものでドブ・スパイクなどと呼ばれているものだ。日本の普通の山野ならスタッドだけで十分だが、岩盤上や倒木が多い場所では、滑ることによる転倒防止という安全面からも、ドブ・スパイクが推奨される。



ピンのついたドブ・スパイク(上)と通常のスタッドのみのシューズ

市販のスポーツシューズには、十分オリエンテーリングにも通用しそうな靴もある。サッカーの練習シューズはよく使われている。最近多様化したトレイルランニングシューズは、一般に頑丈で重すぎるが、モン

トレイルやイノベイトの製品のように、戦闘的に作られたトレイルランニングシューズなら、十分オリエンテーリングにも利用できる。



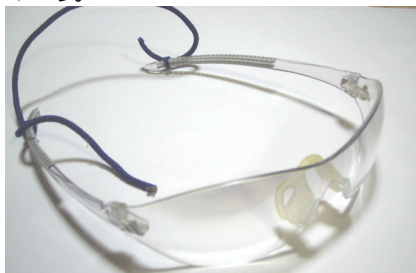
アジダス社製のオリエンテーリングシューズ



モントレイルのトレイルランニングシューズ

ギア・「スポーツグラス」

フィンランドの女子トップエリートランナーのマリカ・ミッコラは、膝に大けがをしたことがあるので、その保護のためのプロテクターをしている。「いつか、子どもたちが私のまねをしてプロテクターを着けるのはやったら嬉しいわ」と冗談半分に言っていたことがある。プロテクターがはやるとは思えないが、同じはやるなら、ぜひシモーネのスポーツグラスははやってほしいものだ。やぶの多い日本では、目を保護するスポーツグラスは秒単位でタイムを縮めることができるオリエンテーリング用具であろう。



アジダス社製のスポーツグラス。フレームがないので、視野が広くて使いやすい。

ギア・「アンクルブレース」

不整地を走るオリエンテーリングでは、捻挫は完全には防止できない。テーピングは初期の固定力は高いが汗や水ですぐに緩んでしまう。合宿で連続して巻いていると、皮膚がむけてしまう。長期遠征ではかさばるし、費用も馬鹿にならない。それでも捻挫を防止したい人にお勧めなのが、アンクルブレースである。

様々な形状のものが販売されているが、写真はテーピングに最も機能が近いもの。片足で5000円から6000円するが、1本500円程度のテープが両足で1回半分しか巻けないことを考えると、かなりお買い得と言える。大きなスポーツショップで手に入る。



アンクルブレース。コストパフォーマンスの良さ、スタート直前でも締め直せる手軽さなどから、筆者は愛用している。

(村越 真)

読者プレゼント

ドットコンパスより:

マグニファイア (拡大鏡) 1個
660.M.C.スペクトラコンパス 1個

山田商会より:

wild sport のヘアバンド 1個

JOE より:

トムテックス社 レガーズ 1個 (紺色)
(サイズM/S 細身)

プレゼント応募方法:

郵便、E-mail にて希望の商品を応募先にご連絡ください。氏名、郵便番号、住所、電話番号も記載してください。

応募先:

〒399-0031 長野県松本市芳川小屋 900-15
木村方 オリエンテーリングマガジン宛
kimura@orientteering.com

応募期限 2007年1月31日

応募多数の場合は抽選とさせていただきます。